

地域社会と大学を結ぶハイブリッド型 フィールド調査実習の効果と課題

2022年12月17日

公益社団法人私立大学情報教育協会 対話集会

国際関係学グループ（創価大学・林亮/日本大学・佐渡友哲/東洋大学・柏崎梢） 話題提供

東洋大学国際社会共生センター客員研究員・非常勤講師

1

フィールド調査実習 Student-led Field Study (SFS)

計2単位

国内4泊5日、海外12日間の引率なし現地調査を含む実習科目

- 真のグローバル人材を育成することを目的とし、現場主義に立脚した「地域づくり」を学ぶとともに、学生一人ひとりが「哲学」を獲得することを目指し2014年度に設立
- 石川県能登半島、日立市中里地区、タイ（バンコク・チェンマイ）、韓国（ソウル・全州）、ミャンマー（シャン州）
- 現地カウンターパートとの連携

- 主体的な関わり合いから、授業後も地域を再度訪問するなど関わり継続する

課題

- 現地受け入れの負担
- 事前調整が不可欠



SFS能登(2022)



SFSタイ(2016)



SFS韓国(2019)



SFSミャンマー(2019)

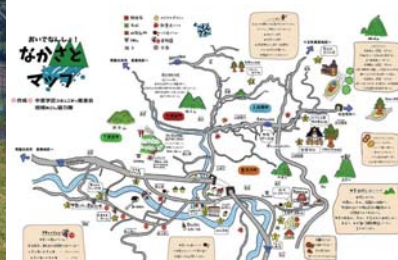
2

SFS日立

- 日立市中里地区
- 中里レジャー農園
- 学科OGで地域おこし協力隊（2014-16）の協力
- 夢ひたちファーム中里（2022より一般社団法人 夢・日立中里）
- グリーンツーリズム、地域拠点づくり、若者の移住と就業、歴史と文化のまちづくりなど



(2016)



制作：中里地区コミュニティ推進委員会
地域おこし協力隊



(2016)



(2017)

- 調査手法やマナーの体得によって大学生としての責任感の醸成
- 地域探訪から、自己探索へ

課題

- 事前のテーマ設定の難しさ
- 現地での調査計画練り直し

2020・21年度 完全オンライン

- 現地コーディネーターの方を含む地域の方に、授業の内容を共有
- 期間を決めて、オンラインインタビューを実施
- 対象地域以外を、調査対象に含めることが可能に

- 大学⇔地方の地域 というギャップを少しずつ埋めていき、対等な目線で取り組める
- オンライン参加、録画機能の活用により、成果をより広く共有できる

課題

- 現地に行けないことの限界
- 学生間のチームビルディング



2022年度

オンライン+1泊2日現地調査

- コロナ禍での宿泊は個室確保が原則。学生の費用負担を考慮し1泊2日の集中調査
- 授業の共有および事前オンラインインタビューを通して、調査テーマ、方法、ターゲットを確認のうえ、現地調査計画を作成できる
- コロナで現地に行けなかった学生の協力（ボランティア）



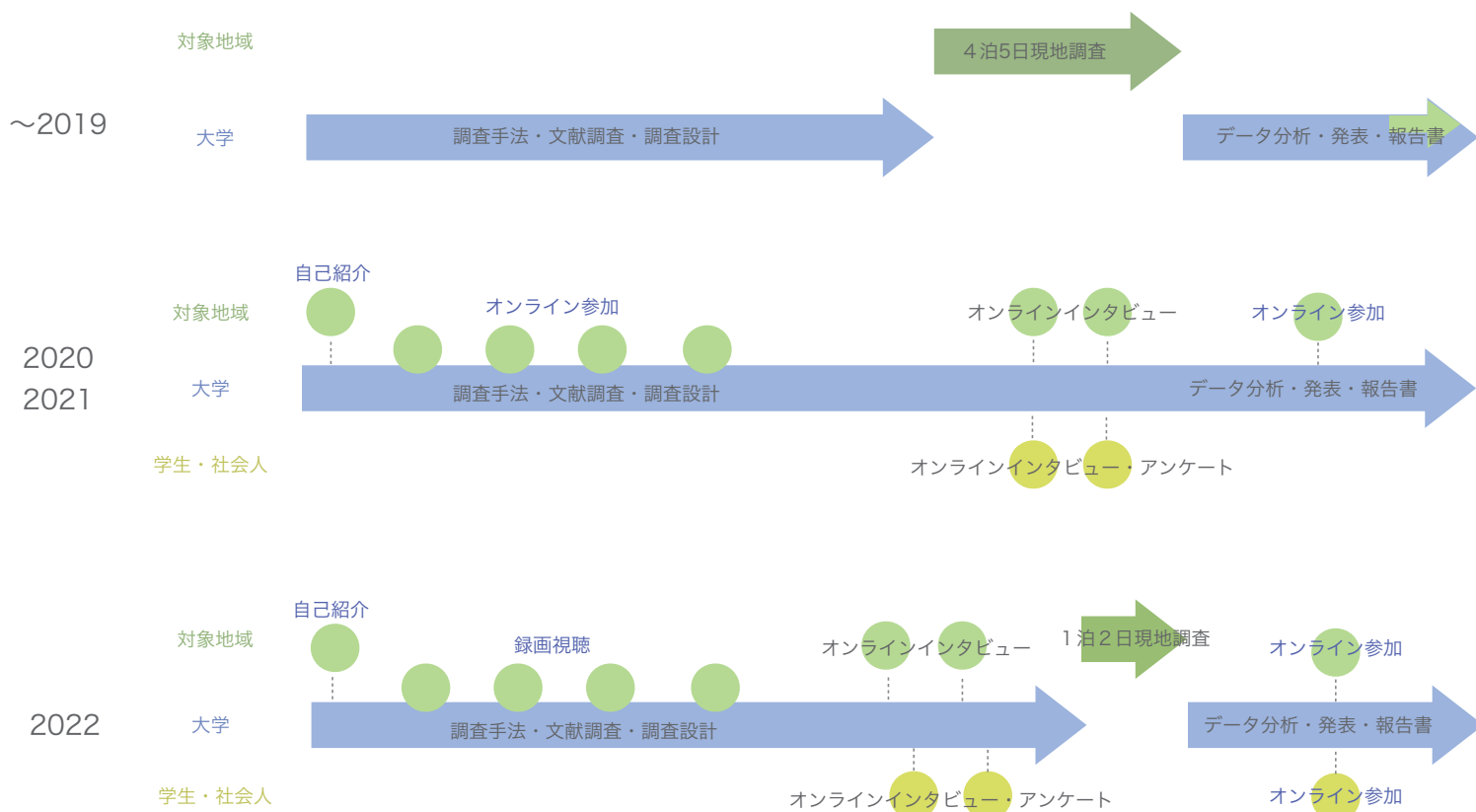
「あんまり人に来てほしくないなあ」
 「りんごはそんなに作りたくないなあ」
 「その提案、すでにやってるよ」



- 集中的に調査を行うことでのチームビルディング
- 地域側の受け入れにおける負担軽減
- 留学生5名（中国、ベトナム、タイ、パキスタン）にとっての機会創出にも

課題

- 履修者数の制限
- 指導体制の充実（理論と実践のバランス）



今後の展望

地域との持続的な連携に向けて

ICTの活用によって

- 大学と対象地域との潜在的なギャップを小さくすることができ、学習機会をより広く提供することが期待される
- フィールド調査の機会を最大化できる
- 海外との連携や発信も進めることができる（コミュニケーション面においては課題有）

- データの共有だけでなく、内容において連続性と発展性が重要
- ICT活用による対象者の拡大 vs. 担当者の負担軽減 < =授業外での地域との持続的な連携が重要か

ありがとうございました